

わが心の自叙伝 菅原洋一

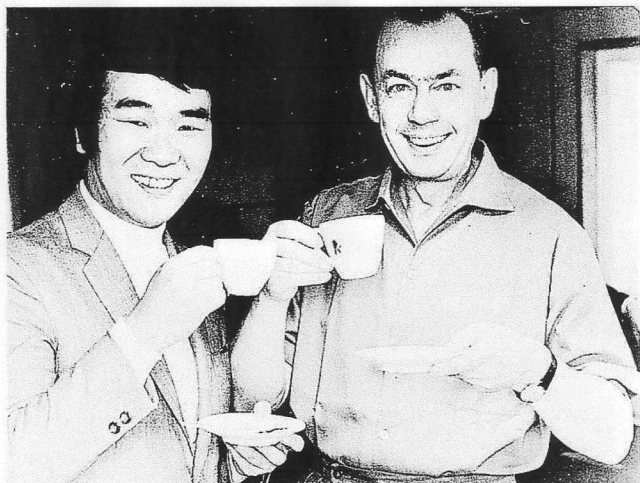
.....▷19

1967(昭和42)年「誰もいない」で歌唱賞、70年にはとうとう「今日でお別れ」でレコード大賞受賞といううれしい出来事と時を同じくして、私の歌手人生の中の記念すべき出会いがあった。それは、タンゴの王様と称されていたドイツのアルフレッド・ハウゼさんと、ステージで共演し、レコーディングした思い出である。

ハウゼは42年に楽団を結成、戦前から日本でもなじみの「ラ・クンパルシータ」や「碧空」などを手掛け、日本には65年に初来日、熱狂的な支持を受けた。シャンソン歌手の石井好子さんのお力添えもあり、ハウゼ3回目の来日公演時に私はゲスト歌手として歌ったのである。

「ハウゼと歌う」

アルフレッド・ハウゼさんと
筆者



たほだだった。80人もの大オーケストラで、「夢のタンゴ」や「奥様お手をどうぞ」など4曲を歌った。共演ステージはまさに夢心地。地に足が着かないという感覚に襲われた。

そのままレコーディングの話が進み、しかも西ドイツ(当時)・ハンブルクにあるスタジオで録音することになった。胸の震えが止まらぬまま、ドイツへ向かいタンゴのレパートリーを中

心にした「菅原洋一ハウゼと歌う」などを録音した。さらにハウゼさんから私のためのオリジナル曲「潮風の中で」を作曲していただいたのである。これは69年の「紅白」で歌わせてもらった。

「知りたくないの」は外国曲なわけだし、「愛のフィナーレ」はザ・ピーナッツのために作られた歌だ。「今日でお別れ」も私が歌う前に、作曲した宇井あきらや加藤登紀子らも歌っていたらしい。「忘れな草をあなたに」もそうなのである。

「タンゴの王様」ハウゼさんの次に出会ったのが「カンツォーネの女王」と言われていたミルバさんだった。彼女が歌った「愛のフィナーレ」をレコードとステージで文字通り競演したのである。圧倒的な歌唱力に、これぞ国際的歌手と感じ入ったものだ。

これは6人の女声重唱団ウォーチェ・アンジェリカが63年に発売し、歌声喫茶などを回って指導している中でヒットの下地が作られた。2年後にすみちよが歌ったあと、私と倍賞千恵子が71年になって競作、ヒットに結びついた歌なのである。

私にとっては「今日でお別れ」に続いてレコーディングして大ヒットした歌が「愛のフィナーレ」で、今でもステージでよく歌う一曲である。この歌の次にヒットしたのが「忘れな草をあなたに」だった。

倍賞さんと数年前にテレビでこの歌を初めて一緒に歌った。歌い終わると彼女が「こんなに情熱的な歌だったのね。菅原さん色っぽいわ」と褒めてくれ、とてもうれしかった。(すがわら・よういち||歌手)

“タンゴの王様”と共演、夢心地